



NORTHERN OWLS

VOL.19
2010.5

■発行
北海道美術学会研究協議会
「NORTHERN OWLS」第19号
北海道美術学会研究協議会
事務局／北海道近代美術館内
札幌市中央区北1条西17丁目
TEL 011-644-6991~6993
FAX 011-644-6885

【談輪】

営 訓章—— 神田日勝記念美術館に関わって

神田日勝記念美術館副館長

「神田日勝は大作こそ多いが作品の絶対数が少ない。木田金次郎は作品数こそ多いが大火で消失して同時期に偏る。なかなかいい具合にはならない」——木田金次郎美術館の開設に向け神田日勝記念美術館の調査に訪れた岩内町の理事者の発言である。その言の通り一枚看板の《馬》（絶筆・未完）こそ開館早々『週刊新潮』の「秘蔵の一点」で大きく紹介されたものの、営農に従事しながら制作年数13年余の日勝が遺した代表作の館蔵作品は20点足らず、それに小品と素描が加わる作品構成では、年2回の展示替えを行ってはいけるが作品総入れ替えとはならない。そんな限界を痛感する2005年春、入館者減に危機感を抱いた運営協議会委員から、旭山動物園の成功を例に、2006年、見せ方の工夫をするよう指摘がなされた。提言には作品を屋外に展示するなどという首肯できかねる迷提言もあった。

そこで最初に手がけたのは、「小檜山博が語る神田日勝」。常設展の展示替えに併せ、小檜山館長が北海道屈指の文学者で、かつ日勝と世代と境遇を共有することに着目、館長の作品解説を展示するという試みであった。作家の一貫した感性による作品論が展開されたことで、日勝作品の鑑賞に併せて新たな視点が入り込め、このことは概ね好評であったと思われる。この時僕に影響を与えたのは、長野県の戦没画学生慰霊美術館「無言館」の窪島誠一郎館主による作品解説。画学生の遺作に描かれたのは、故郷の風景、家族、そして恋人の姿であり、戦争の悲惨さなどはほとんどない。作品に添えられた「あと一分この絵（恋人の姿）を描

いていたかった。外では出征兵士を送る人々の声が聞こえていた。必ず帰って続きを描くから。しかし彼は帰っては来なかった」という一文が、戦争の悲惨さや強い死の悲しみを呼び起こし、それが涙を誘っている。是非は別としてこれは見せ方の典型である。「…が語る日勝」の試みは時期を選んで再現したいと思う。

また、代表作に焦点をあて、それを徹底的に照射する試みとして、開館15周年記念事業で畢生の大作《室内風景》を、北海道立近代美術館・美術評論家・独立展と十勝画壇を代表する4氏に、それぞれの視点から討論していただいたが、結果的に作品の奥行きが深さが浮き彫りにされ、作品を掘り下げる作業として意義のあるものであった。

展覧会では、年譜的な作品展示ではなく、平成20年は全道展と独立展出品作を中心とした構成で、札幌や東京の視点で見た神田日勝の作品の流れを概観する試みに取り組み、21年度の「神田日勝と1970年の美術」では、1970年の全道展における神田日勝作品の位置を検証した。この作業を通じて当時画壇を席巻したアンフォルメル風の風潮の影響とその超克が、同時期に開催された岸本裕躬回顧展なども含め実感することができた。

例え制作された作品数が僅少であっても、一点一点の作品を丹念に取り上げ深めていく作業と、新しい視点を提供することを通じて、その限界を乗り越えて行きたい。個人名を冠する美術館に携わる者として、その可能性を信じて作業を進めている。

NORTHERN OWLS VOL.19 INDEX

談輪／神田日勝記念美術館に関わって 営 訓章	1
総論／公立美術館——コレクションの現状と活用 佐藤友哉	2
報告／北海道の美術作品コレクションの現状 久米淳之	3
資料①／コレクション状況アンケート2009	4
資料②／ワークショップ	
「美術館コレクションを活かす3つの方法」	10
各論／札幌芸術の森美術館のコレクションについて 岩崎直人	12

各論／中村善策展の学校教育との連携について 星田七重	13
各論／日本美術の評価における美術館の役割 鈴木幸人	14
所属館紹介／室蘭市民美術館 細川義信	15
所属館紹介／洞爺湖芸術館 中谷麻美	16
所属館紹介／仙台藩白老元陣屋資料館 武永 真	17
会員名簿・規約・役員	18

公立美術館——コレクションの現状と活用

北海道立近代美術館学芸副館長

佐藤 友哉

美術館にとって、コレクションがいかに重要なのかはここで述べるまでもない。「美術館の顔が建物であれば、コレクションはその骨格である」とも言われるが、コレクションは骨格どころか、美術館活動を実現するための筋肉でありまた血液でもあると言うこともできるだろう。とくにわれわれ美術館の現場にいるものはその感を強くするのではないか。

近年、美術館における教育活動が重視されている背景には、美術館の機能や使命に対する自覚や、美術館経営への積極的な取り組み、あるいは学校をはじめとする地域とのより深い関係を構築するという意識が高まってきたことがあげられる。また、地方自治体の財政難などによって事業予算が削減されてきたために、これまでの特別展重視ともいえる状況が変更を余儀なくされたという側面もあったかもしれない。

いずれにせよ、そのために、館のコレクションをいかに有効に使っていくか、あるいはコレクションを核とした活動をどのように多様に展開するかが、さかんに唱えられるようになってきたのだろう。さらに他館のコレクションによってどのような企画が出来るかということを含めて、館内外のコレクションに対する熱いまなざしが向けられるようになってきたのではないかと思う。もっとも当然のことながら、コレクションを軸とした館運営のあり方を探ることは美術館の根幹的な活動なのであり、背景はさておくとしても、見方によっては再び本来の活動へ立ち返っているということなのだ。

昨年末、財団法人地域創造が『これからの公立美術館のあり方についての調査・研究報告書』をまとめた。これは地方自治体の首長や美術館関係者に対して送付されたもので、内容は公立美術館の現状と課題を踏まえつつ、美術館経営の改革、連携による事業展開、美術館の支援方策などについて提言している。もちろん、このなかでもコレクションについては“館の価値を決める重要な要素”としており、公立美術館のコレクションについての現状分析や提言などが多方面でなされている。

これによれば、公立美術館のコレクションは近年になってある程度の充実を見せているが、内容が地元作家や現存作家の作品に偏っていること、また、購入費や収蔵スペースが不足し、データベースの整備も不十分である、という指摘がまずなされている。もちろんこのことは美術館にとって解決すべき課題だが、これはさておき、コレクションに関連して今後の提言としてあげているのは、公立美術館の経営改革と多方面の連携による事業展開を実現するための方策のひとつとして、コレクションを可能な限り共有化すべきだということだ。そのためにデータベースの共有化など、基盤（プラットフォーム）づくりへの支援が必要だということである。

昨年、当会でも道内美術館の「コレクション状況アンケート」を行った。これによれば、道内31館の収蔵作品が35,425点を数えるという結果が出た。またこのアンケートには各館の収集方針やまとまったコレクションが示されているだけでなく、活用状況のデータも示されている。内容については、たしかに先の報告書の指摘に近いものもあるだろう。しかしこうした試みは、コレクションの共有化という方向に向かう作業の一つと見てよく、期せずして双方がコレクションについて同様の方向性を見出していたということなのではないかと思う。したがって、できれば次のステップとして、道内の美術館コレクションのデータベースの構築とその共有化も視野に入れたいところだ。そうすることによって、単館の枠を超えたスケールメリットのあるコレクションの活用がなされていくにちがいない。

コレクションの活用ということであれば、まさに道内の各館がこれまでさまざまな試みを行ってきたことは承知のことだろう。コレクションの魅力を引き出すための多彩な企画や、展示と連動したワークショップなどの教育活動。また大学などとの連携などもその一つの表れだろう。しかし今注目されるのは、地域とコレクションのかかわりではないかと思う。

たとえば、当会の前回の研究協議で発表された、市立小樽美術館の中村善策のコレクションを用いた市内の中学校校とのワークショップなどは、地域を再発見するというまさに現在の美術館や博物館が期待されている試みだった。すなわち、コレクションの活用とはコレクションを縦横に用いたテーマ展示を試みるというだけでなく、コレクションを地域との関係のなかに位置づけ、そこから地域のかかえる課題や問題を解決するといった次元にまで拡大できるものなのだ。

しかし、そのために必要なのは、コレクションに対する絶えざる調査や研究であることはいうまでもない。またコレクションの背景もさることながら、一方で地域の課題について無関心というわけにはいかないことも自明のことだろう。コレクションを効果的に活用するということは、すなわちどこまでコレクションを知りえているかにかかっていると同時に、その価値が地域のなかにどう位置づけられるかというヴィジョンを持つことにかかっているのではないかと思う。

昨今、美術館が地域の再生や活性化、あるいは創造都市の核になるという期待が高まっているようだ。先にあげた地域創造の報告書も、基本的なスタンスはこの地域の活性化ということである。コレクションの活用という論議も、まさにこうした方向と連動するといっていよい。しかしそれは美術館の本来の存立の大前提が保証されてはじめて達成されるということを忘れてはならないと思う。

北海道の美術作品コレクションの現状

北海道立近代美術館主任学芸員

久米 淳之

第17回北海道美術館学芸員研究協議会において、加盟館の美術作品のコレクション状況のアンケート調査を行うとともに、参加者でコレクションを活かすためのアイデアだしを目的としたワークショップを開催した。

コレクション状況アンケート（4～9頁、資料①参照）

アンケート調査は会の案内とともに主にメールにて加盟館に依頼し短時間で回収したもので、各館担当者には大変な労力をかけたが、加盟38館・1団体のうち31館の回答を得、おおよその北海道の公的な美術コレクション状況が確認できた。ただ実数については、回答を得られなかった館のうち、石狩美術館のルイ・イカールの銅版画やガレ工房、ドームのガラスコレクション、市立函館博物館の美術資料のコレクションなどはまとまった数が想定され、作品総点数はさらに多くなることは間違いない。また、寄託作品をコレクション数に加えているかどうかは各館によって事情が異なること、作品分類についても絵画の詳細の分類などは全館で統一されているわけではないため、精緻なデータとは言い難いことは、付記しておかなければならない。

それでも得られた結果より各館の特色を見出すと、まずは道立文学館のバラエティに富んだコレクションがあげられる。文学にかかわる資料のなかには、有島武郎の絵画や佐藤忠良の挿画作品、あるいは掛川源一郎、綿引幸造の写真作品など、文学館としての活動の水準が非常に高いことがうかがえる。他に近代美術館のコレクションの柱のひとつであるエコール・ド・パリの作家であるドラン、キスリングの作品が釧路市立美術館にも収蔵されていたり、新規加盟館の室蘭市民美術館のまとまった写真コレクションなど、道内での作品交流による展覧会開催の可能性を想定できるコレクションもいくつかあった。また各館それぞれの「柱」をつぶさにみていくと、もちろんすべての館に共通する方針ではあるが、特に紋別市立博物館、木田金次郎美術館、神田日勝記念美術館、西村計雄記念美術館、小川原脩記念美術館、江別市セラミックアートセンター、夕張市美術館、北網圏北見文化センター、中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館などの館に、北海道という大きな地域よりも、それぞれの館が立脚する地域を大事にし、それぞれの地元作家にまなざしを向けた収集活動が見られ、地域に根ざす美術館としての誇らしい姿も想像できる。

また、アンケート末尾に設けた「コレクション価値を高めるアイデア」の欄には、すぐにでも実行に移せるような、あるいは既に移している具体的なものが多く、これは翌日のワークショップにおいても大いに参考になり、リアリティあるものが

多かった。特に後志のミュージアムロード参加館の共同展や、夕張の街をあげての記念行事の展覧会の開催などの地域周辺でのコレクションの活用や、洞爺湖のビエンナーレ作品の町民の買い上げ、釧路市美の市民共同の展示作業など地域の人が作品に実際に触れる機会をつくること、開拓記念館の、博物館の美術資料の価値を博物館と美術館が連携するなかで見出し、高めていこうとする志向など、アイデアの段階を超えすでに十二分に価値を高めているといえる活動や考え方が挙げられており、そうしたことが確認できたことも、アンケート調査の収穫であったといえるのではないだろうか。

ワークショップ「美術館コレクションを活かす3つの方法」

（10～11頁、資料②参照）

会期2日めの3月6日に午前10時からの2時間で「コレクションの活かし方を考える」をテーマに参加者でワークショップを行った。短い時間ではあるが参加者を7～8名ずつ6班に分け、それぞれのグループ別にディスカッションを行い、その成果を発表した。基本的に学芸員と美術関係者の集まりであるということもあってか、ひとつひとつのアイデアは非常に具体的であり、普段から考えていてもなかなか実行できない、といったレベルの案も多数みられた。ほぼ共通して挙げられていたのは、コレクションを積極的に館外へ持ち出しての展示、移動展の提案や、作品に付加価値をつけるためのグッズ開発などプロモーション展開のアイデアであった。次段階のステップとなる、それらを実現させる方策はなかなか具体性を伴わなかったが、結局はプロデューサーやスポンサーを見出すこと、そして運営主体となる組織と学芸部門が有効的に連動し、最低限でも予算の確保が必至となること、もちろんそればかりでなくアイデアを実行に移していく行動力、瞬発力も我々自身に問われるものだということも、私見として強く感じられた。

いずれにしてもさまざまなコレクションを活かす活動を考えることは、同時に「美術館とは何か」という大命題を考えることになる。どんなアイデアも、美術館がどうあるべきかという理念があってこそ、館の運営方針、方向性に則ったうえでの展開を、継続して行えなければ意義がなくなるように思われる。学芸員ひとりひとりが理念と広い視野を持って、時間軸、地域軸を携えた活動をしていくことがこの時代だからこそ必要となる。

ワークショップのディスカッションは、我々の仕事の足元を見直し確認する、いい機会となった。

コレクション状況アンケート2009

*2009年2月から3月にかけて
各館より聴取した回答をもと
に整理した。

加盟館31館 2007(平成19)年度(美術)作品収集状況

分野	作品総数	%
油 彩	10,020	28.3
日 本 画	821	2.3
水彩・素描	7,871	22.2
版 画	4,846	13.7
彫 刻	1,677	4.7
工 芸	8,198	23.1
書(拓本、刻字含む)	1,102	3.1
デ ザ イン	239	0.6
写 真	504	1.4
中 国 画	29	0.08
部 族 芸 術	118	0.3
総 点 数	35,425	

- ★北海道開拓記念館の美術資料総数(700点)は含んでいない。
★アルテピアッツァ美唄の野外彫刻(14点)は含んでいない。
★小川原脩記念美術館の水彩・素描の概数は、総点数を基準に
修正した。

回答館:

網走市立美術館
荒井記念美術館
アルテピアッツァ美唄
江別市セラミックアートセンター
小川原脩記念美術館
北一ヴェネツィア美術館
木田金次郎美術館
釧路市立美術館
札幌芸術の森美術館
鹿追町立神田日勝記念美術館
市立小樽美術館
関口雄揮記念美術館
仙台藩白老元陣屋資料館
滝川市美術自然史館
洞爺湖芸術館
中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館

西村計雄記念美術館
北網圏北見文化センター
北海道開拓記念館
北海道開拓の村
北海道立旭川美術館
北海道立帯広美術館
北海道立近代美術館
北海道立釧路芸術館
北海道立函館美術館
北海道立文学館
北海道立三好岸好太郎美術館
本郷新記念札幌彫刻美術館
室蘭市民美術館
紋別市立博物館・まちなか芸術館
夕張市美術館

計31館(五十音順)

館名: 網走市立美術館 開館年: 1972(昭和47)年
作品収集費(年間予算): 基本は周年記念時に購入
常設展示室: 有 広さ: 第3・第4展示室 308㎡
収集方針:

郷土ゆかりの作家、及び当地に地縁のある作家、テーマを北とし制作する作家
まとまったコレクション: 居串佳一、高橋道雄、木村捷司、長谷川誠
代表的な作品:

居串佳一「静夜」(1937年)「北方に生く」(1941年)
高橋道雄「ひるね」(1948年)「準備」(1940年)
木村捷司「シャーマンの集い」(1939年)「網を繕うギリヤーク」(1939年)
長谷川誠「モスク」(1999年)「セルヴェ」(1999年)

●平成19年度(美術)作品収集状況

分野	作品総数	%
油 彩	258	24
日 本 画	33	3
水彩・素描	670	62
版 画	94	9
彫 刻	8	1
工 芸	5	0.5
書	7	0.5
総 点 数	1,075	
寄託作品は収蔵数に含まず		

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	1,047	97
日 本	24	2
海 外	4	1
合 計	1,075	

●所蔵作品活用状況(平成20年度)

形式	点数
常 設 展	58
所 蔵 展	76
貸 出	3

館名: 財団法人 荒井記念美術館 開館年: 1989(平成元)年
作品収集費(年間予算): なし 常設展示室: 有 広さ: 1,045.7㎡
収集方針:

アメリカの音楽家ミッチ・ミラー由来のピカソ版画コレクションをはじめ、有島武
郎の小説「生まれ出づる悩み」を題材とした北海道の画家たちの油彩・彫刻、郷土
出身の西村計雄の油彩など。

まとまったコレクション:

バプロ・ピカソ 版画 267点 西村計雄 油彩 84点
「生まれ出づる悩み」油彩26点 「生まれ出づる悩み」彫刻 10点

代表的な作品: バプロ・ピカソ「貧しい食事」(1904年)「女の顔」(1962年)

●平成19年度(美術)作品収集状況

分野	作品総数	%
油 彩	84	23.2
版 画	267	73.8
彫 刻	11	3.0
総 点 数	362	100.0

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	95	26.2
海 外	267	73.8
合 計	362	100.0

●所蔵作品活用状況(平成20年度)

形式	点数
常 設 展	333
貸 出	65

館名: アルテピアッツァ美唄 開館年: 1992(平成4)年
作品収集費(年間予算): なし 常設展示室: 有 広さ: 65,000㎡
収集方針: 安田侃の作品に限定している。
まとまったコレクション: 安田侃彫刻作品
代表的な作品: 天沃・天聖・妙夢など

●所蔵作品活用状況(平成20年度)

形式	点数
常 設 展	14

●コレクション価値を高める活用法案、あるいは具体的な計画

安田侃の作品に限定し、氏の作品が一堂に鑑賞できることや、
自然と調和した中での展示方法が当館の魅力となっていると
考えているので、今後もこのスタンスでやっていきたい。

館名: 江別市セラミックアートセンター 開館年: 1994(平成6)年
作品収集費(年間予算): 150千円(平成20年度決算)
常設展示室: 有 広さ: 770.25㎡
収集方針:

- ①郷土縁の作家・小森忍の陶磁作品及び関連資料の収集
②道内現代陶芸作家の作品収集
③道内産業作品の収集
④参考となる本州陶磁作品の収集
⑤市内ガラス作家作品の収集
⑥道内煉瓦製品及び生産道具の収集

まとまったコレクション:

- ①小森忍作品並びに関連研究資料
②道内現代陶芸作家作品
③道内煉瓦製品並びに生産道具

代表的な作品:

- ①辰砂長慶瓶(小森忍 大正10年代) ②茶葉壺鳳凰紋燗瓶(小森忍 昭和3年)
③藍青宝石釉罌壺(小森忍 昭和20年代)

●平成19年度(美術)作品収集状況

分野	作品総数	%
工 芸	954	139
総 点 数	954	100

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	1,633	85
日 本	248	12
海 外	36	3
合 計	1,917	100

●所蔵作品活用状況(平成20年度)

形式	点数
常 設 展	367

●コレクション価値を高める活用法案、あるいは具体的な計画

- ①センター1Fエントランスホールにおけるロビー展
②小森忍作品の全国巡回展出展
③市内小中学校における煉瓦資料の移動展

館名：小川原脩記念美術館 開館年：1999（平成11）年
作品収集費（年間予算）：平成19年度は予算措置なし
常設展示室：有 広さ：345.74㎡
収集方針：
小川原脩の作品を中心に、地域ゆかりの作家たち（麓彩会の作家たち）の作品をも収集。
平成12年度から継続して小川原作品を購入、平成20年度までに33点を購入。
まとまったコレクション：
小川原脩作品 谷ロー芳作品
代表的な作品：
「納屋」（1933年） 「人間の季節」（1938年）
「農民達」（1942年） 「宗谷海峡の漁師」（1953年）
「群化社会B」（1974年） 「渡し舟ー満江」（1979年）
「チベット讃歌」（1982年） 「樹」（1990年）
「九宮島の風景」（1994年）

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%	
油 彩	593	48	梱包された作品は除外
日 本 画	6		
水彩・素描	約600	50	整理途中で発見あるので概数
版 画	18		
総 点 数	1,237		

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	1,217	98
日 本	17	
海 外	3	
合 計	1,237	

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	70
貸 出	12

●コレクション価値を高める活用法案、あるいは具体的な計画

近隣の美術館同士のコレクションの相互交流は、この地方においては有効的な手段として定着しております。おらがマチのコレクション、となりマチのコレクション、向こうのマチのコレクションがときどき行き来することを想像してみてください。実に楽しい展覧会が開催できます。

館名：財団法人 北一ヴェネツィア美術館 開館年：1988（昭和63）年
作品収集費（年間予算）：なし 常設展示室：有 広さ：825.07㎡
収集方針：
15世紀以降のヴェネツィアガラス工芸から、各分野のすぐれた作品を系統的に収集しています。
まとまったコレクション：
★作家作品
アルフレード・バルビーニ アルキメデ・セグーゾ
ヴィットリオ・コスタンティーニ ピノ・シニョレット
ルチオ・ブッコ など
★工房作品
アンフォーラ エリーテ・ムラノ ヴェニーニ パウリー など

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%
工 芸	5,562	100
総 点 数	5,562	100

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
海 外	5,562	100
合 計	5,562	100

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常設展・特別展	約3,450

館名：木田金次郎美術館 開館年：1994（平成6）年
作品収集費（年間予算）：なし 常設展示室：有 広さ：312.5㎡
収集方針：
木田金次郎の作品を収集（開館から当面の間、他作家の作品収蔵はしない）
まとまったコレクション：木田金次郎の作品
代表的な作品：
「ポプラ」（1924年）
「海」（1936年）
「大火直後の岩内港」（1954年）
「春のモイワ」（1961年）
「バラ（絶筆）」（1962年）

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%	内・寄託作品数
油 彩	139	64.7	78
水彩・素描	76	35.3	15
総 点 数	215	100	93

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	215	100
合 計	215	100

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常設展	84
貸 出	54 [36(網走市立美術館) 1(町田市民文学館) 17(ミュージアムロード共同展)]

●コレクション価値を高める活用法案、あるいは具体的な計画

開館15周年にあたる平成21年度は、年間を通じて収蔵作品を展示する「コレクション再発見」を行う予定。3本の展示をモチーフ別に開催予定。

館名：釧路市立美術館 開館年：1992（平成4）年／名前変更 2000（平成12）年
作品収集費（年間予算）：なし 常設展示室：無
収集方針：
釧路ゆかりの作家の作品、釧路がモチーフとなった作品、国内外の優秀な美術作品
まとまったコレクション：
久本春雄の作品（素描が中心）
代表的な作品：
尾山幟「彩苑」（1953年）「緑苑」（1951年）
久本春雄「ショールを持つ少女」（1923年）「鶴葦原」（1927年）
アンドレ・ドラン「婦人の肖像」（制作年不詳）
モイーズ・キスリング「若い婦人の肖像」制作年不詳

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%
油 彩	93	26.1
日 本 画	34	8.6
水彩・素描	199	55.9
版 画	14	3.9
彫 刻	13	3.7
工 芸	3	0.8
総 点 数	356	

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	328	92.1
日 本	23	6.5
海 外	5	1.4
合 計	356	

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	83
貸 出	1

●コレクション価値を高める活用法案、あるいは具体的な計画

地域の作家、個人所蔵家などからの借用作品と、美術館のコレクションを一緒に展示することで、新たな視点で地域の美術を見つめなおすきっかけとする展覧会の開催。

館名：札幌芸術の森美術館 開館年：1990（平成2）年
作品収集費（年間予算）：なし
常設展示室の有無：有/B展示室（旧講堂）、野外美術館
広さ：B展示室89㎡、野外美術館7.5ha
収集方針：
近代および現代の優れた彫刻や、現代の美術の動向を綴る代表的な作品、札幌にゆかりの作家の作品および美術資料を系統的に収集する。
まとまったコレクション：
部族芸術（アフリカの仮面）、「10人の写真家による被写体四谷シモン展」写真
代表的な作品：
砂澤ビッキ「四つの風」（1980年）
メタルド・ロッソ「ユダヤの少年」（1892-93年）
舟越桂「雪の上の影」（2002年）
佐藤朝山「山鳩」（1931年）

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%
油 彩	425	41.3
日 本 画	27	2.6
水彩・素描	80	7.8
版 画	96	9.3
彫 刻	239	23.2
写 真	45	4.4
部 族 芸 術	118	11.5
総 点 数	1,030	100.0

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	685	66.5
日 本	164	15.9
海 外	181	17.6
合 計	1,030	100.0

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	11/B展示室、76/野外美術館
貸 出	31
そ の 他	1/ロビー1、66/企画展、6/屋外常設

館名：鹿追町立神田日勝記念美術館 開館年：1993（平成5）年
作品収集費（年間予算）：予算計上せず。
（日勝作品が適価で購入できる場合、基金より補正）
常設展示室：有 広さ：351㎡
収集方針：神田日勝の作品を収集
まとまったコレクション：神田日勝の作品
代表的な作品：「馬（絶筆）」（1970年）

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%
油 彩	24	92
水彩・素描	1	4
版 画	1	4
総 点 数	26	100

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	26	100
合 計	26	100

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	23

館名：市立小樽美術館
開館年：1979（昭和54）年
作品収集費（年間予算）：なし
常設展示室：有
広さ：167㎡
収集方針：
地元小樽にゆかりの深い美術、北海道美術の黎明期に活躍した画家たち、道内最初の公募団体創立者たちの作品を収集する。記念ホールを有する中村善策、一原有徳（将来計画）についてはその美術家の活動拠点であることから、一次二次（資料）にかかわらず可能な限り収集していく。
まとまったコレクション：中村善策、一原有徳
代表的な作品：
筆谷等親「星嶺」（1925年）、中村善策「海港の秋」（1959年）、
長谷川昇「鏡前裸婦」（1972年）、小寺健吉「学校の見える雪景」（1958年）、
工藤三郎「老婦人」（1920年代）、三浦鮮治「岩影」（1954年）、
大月源二「走る男」（1936年）、一原有徳「COM ZON（B）」（1992年）

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%
油 彩	752	31.6
日 本 画	44	1.9
水彩・素描	142	6
版 画	1,353	56.9
彫 刻	59	2.4
工 芸	27	1.1
総 点 数	2,377	100

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	2,301	96.8
日 本	76	3.2
合 計	2,377	100

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	133
貸 出	2

●コレクション価値を高める活用法案、あるいは具体的な計画

企画展に館蔵品を多く取り入れる。新聞や印刷物（カレンダー制作など）に図版掲載とコレクション紹介記事などを書いていただく。

館名：関口雄揮記念美術館
開館年：2005（平成17）年
作品収集費（年間予算）：なし
常設展示室：有
広さ：376㎡（3室合計）
収集方針：
日本画家・関口雄揮の全時代に及ぶ本作、小下図、スケッチを収集する。
まとまったコレクション：
永観堂障壁画小下図群（26点）
代表的な作品：
「枯野」（1994年、第26回日展出品作） 「冬の華」（2002年、第34回日展出品作）
「曠野の秋」（2006年、第38回日展出品作） など

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%
日 本 画	184	6.20
水彩・素描	2,785	93.80
総 点 数	2,969	100

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
日 本	2,969	100
合 計	2,969	100

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	178

館名：仙台藩白老元陣屋資料館
開館年：1984（昭和59）年
作品収集費（年間予算）：特に定まってはいるが、必要あればその都度対応
常設展示室：有
広さ：413㎡
収集方針：北方関係資料。特に仙台藩の北方警備に関する文書・絵図等
まとまったコレクション：「三好監物関係文書」 約400点
代表的な作品：「仙台藩白老元陣屋之図」「国後島図」「色古丹島図」「蝦夷島奇観」文久元年東駒作 など

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	200

館名：滝川市美術自然史館
開館年：1986（昭和61）年
作品収集費（年間予算）：なし
常設展示室：有
広さ：222.03㎡
収集方針：
滝川市ゆかりの作家を中心に収集。
特に滝川市出身の日本画家・岩橋英遠、洋画家・一木万寿三
まとまったコレクション：
岩橋英遠（日本画）、一木万寿三（洋画）、上田桑鳩（書）、碓井広重（植物画）
代表的な作品：
岩橋英遠「北の木たち」（1983年）「氷結する湖」（1988年） など
一木万寿三「果樹園晩秋」（1959年）など
上田桑鳩「命」（1967年） など

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%
油 彩	115	15
日 本 画	25	4
水彩・素描	491	65
版 画	70	9
彫 刻	9	1
工 芸	46	6
総 点 数	756	100

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	748	98
日 本	6	1
海 外	2	1
合 計	756	100

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	56
移動展等	67

●コレクション価値を高める活用法案、あるいは具体的な計画

滝川および周辺地域出身の画家に関する調査・研究・普及事業につとめること。

館名：洞爺湖芸術館
開館年：2008（平成20）年
作品収集費（年間予算）：なし
常設展示室：有
広さ：計 336.9㎡
収集方針：
収蔵している作品は、洞爺湖町（旧洞爺村）の芸術文化振興事業として収集・制作された作品および、寄贈された文学初版本コレクションである。
まとまったコレクション：
・洞爺村国際彫刻ビエンナーレ入選・受賞作品
・砂澤ビック作品
・近・現代文学初版本コレクション
・並河萬里写真作品
代表的な作品：
砂澤ビック「風」（1988年）「風の日」（1988年）
エマニエル・ハトソフ「ANCHOR」（1995年）
ニシム・メルカド「MOMENT」（1997年）

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%
水彩・素描	9	7
彫 刻	100	81
写 真	15	12
総 点 数	124	100

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	25	20
日 本	28	23
海 外	71	57
合 計	124	100

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	119
そ の 他	5

●コレクション価値を高める活用法案、あるいは具体的な計画

洞爺村国際彫刻ビエンナーレでは、受賞作品が町により買い上げられた。しかし入選作品の中には町民に買い上げられた作品も多数ある。平成21年度は春季と秋季の2回、個人所有者協力を得、これらの作品を借用して特別展を予定している。個人所有者には作品の再評価を促し、観覧者に約20年のビエンナーレ展にみる現代彫刻の流れを周知することで、ビエンナーレ作品の価値を高めたい。

館名：中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館
開館年：1994（平成6）年
作品収集費（年間予算）：1,300,000円（20年度）
常設展示室：有
広さ：493.34㎡
収集方針：
・中原悌二郎の立体及び平面作品
・荻原守衛、石井鶴三、戸張孤雁など、中原悌二郎に影響を与えた彫刻家の作品
・旭川ゆかりの彫刻家の作品
・中原悌二郎賞、中原悌二郎賞優秀賞受賞作家の立体及び平面作品
まとまったコレクション：
中原悌二郎 藤川巖三 山内壮夫 木内克 加藤頭清
代表的な作品：中原悌二郎「若きカフカス人」（1919年）

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%
油 彩	8	0.7
水彩・素描	704	61.3
版 画	175	15.3
彫 刻	260	22.7
総 点 数	1,147	100

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	764	66.6
日 本	382	33.3
海 外	1	0.1
合 計	1,147	100

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	91
移動展等	22
貸 出	23
そ の 他	72（企画展）

館名：西村計雄記念美術館
開館年：1999（平成11）年
作品収集費（年間予算）：なし
常設展示室：有
広さ：274㎡、271㎡、48㎡
収集方針：
西村計雄の作品その他の資料を収集する
まとまったコレクション：
西村計雄の油彩画、山岸正巳の油彩画およびパステル画
代表的な作品：
西村計雄「童子」（1943年、第6回新文展特選）
「きもの」（1959年、バリ個展出品作）
「月と桃の花」（1977年、バリ個展出品作）

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%	内・寄託作品数
油 彩	5,397	99	2
水彩・素描	62	1	0
総 点 数	5,459	100	2

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	5,459	100
合 計	5,459	100

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	462
貸 出	29
そ の 他	20

館名：北網園北見文化センター 開館年：1984（昭和59）年
作品収集費（年間予算）：なし ※一昨年末で隔年¥1,000,000 常設展示室：無
広さ：※約15㎡ * 条例により定められている美術館常設展示室は無いが、美術館用の常設スペースがある

収集方針：
i) 北見地方（網走支庁管内）の美術作品等を収集する。
a) この地方に在住、または在住していた作家の作品
b) この地方にゆかりの深い作家の作品
c) この地方に取材した作品
ii) この館は収蔵施設であり、この館に収蔵される作品・資料は、今後館が存続する限り長く保存される市民の宝であるから、文化的・芸術的にも、保存に足る意義、及び価値を持つ作品でなければならない。
iii) 勿論、世界的に有名な作家の作品や、日本の代表的作家の作品等も、入手のチャンスがあれば収蔵する。

まとまったコレクション：
香川軍男も版画作品 景川弘道版画作品
代表的な作品：
香川軍男も版画作品 景川弘道版画作品

館名：北海道開拓記念館 開館年：1971（昭和46）年
作品収集費（年間予算）：なし 常設展示室：有
広さ：北海道の通史展示全体で、3,011㎡

収集方針：
北海道開拓記念館では、北海道の自然や歴史、文化に関わる資料を収集・保存・公開・活用している。「美術資料」は、当館に10ある資料分類の一つ。2003年12月に策定した「北海道開拓記念館中長期計画目標」では、「寄贈による資料の収集が困難と思われるアイヌ絵や松前藩関係資料などの歴史資料」について購入などによる収集を努める、とあるが、予算的に厳しい状況が続いているので、現実には寄贈に頼らざるを得ない状況になっている。

まとまったコレクション：
①妻沼コレクション【近世・近代の「アイヌ絵」を中心に45点】
②北海道庁旧蔵の吉田初三郎原画【11点】
代表的な作品：
①「蝦夷国魚場風俗図巻」（小玉貞良作品の模写）
②吉田初三郎「北海道鳥獣図」（八曲一隻の屏風、1936年）

館名：北海道開拓の村 開館年：1983（昭和58）年
作品収集費（年間予算）：なし 常設展示室の有無：
広さ：
収集方針：
博物館資料としての収集は北海道開拓記念館が行うこととしている。
よって下記項目は北海道開拓記念館のアンケートを参照されたい。

館名：北海道立旭川美術館 開館年：1982（昭和57）年
作品収集費（年間予算）：必要に応じて北海道美術品取得基金を活用
常設展示室：有 広さ：241㎡
収集方針：「木の造形作品」ならびに「道北の美術」を収集する。
まとまったコレクション：山口正城の抽象絵画
代表的な作品：難波田龍起「生の交響詩」（1992年）
佐藤 進「館」（1980年）
砂澤ビッキ「ニツネカマイ」（1988年）
舟越 桂「午後にはガンター・グローブにいる」（1988年）
デイヴィッド・ナッシュ「十字形に焦がした卵」（1994年）
黒田 辰秋「神代標彫文飾棚」（1974年）

館名：北海道立帯広美術館 開館年：1991（平成3）年
作品収集費（年間予算）：必要に応じて北海道美術品取得基金を活用
常設展示室：有 広さ：209.5㎡
収集方針：
・道東ゆかりの代表的な作家の作品とこれに関連する作品
・近現代の版画やポスターを中心としたプリントアート
・農村風景・風俗を主題とした西洋の美術作品
まとまったコレクション：
・19世紀末から20世紀前半を中心としたヨーロッパのポスター（222点）
・バルビゾン派の絵画等（75点）
代表的な作品：
・ロートレック「ディヴァン・ジャポネ」（1892年）
・ミュシャ「タバコ巻紙『ジョブ』」（1896年）
・カッサンドル「ノルマンディー号」（1935年）
・リクテンスタイン「蓮蓬と雲」（1992年）

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%	内・寄託作品数
油 彩	152	39.6	10
日 本 画	15	3.9	5
水彩・素描	77	20.1	0
版 画	117	30.5	0
彫 刻	6	1.6	1
工 芸	10	2.6	0
書	7	1.8	0
総 点 数	384	100	16

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	381	99.2
日 本	3	0.8
合 計	384	100

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	13
貸 出	2

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%
総 点 数	700	

絵画や工芸ばかりではなく、刀剣・銃砲類も「美術資料」として登録しています。また、特に近代の書や版画類は「文書資料」として登録されている資料も多く、正確な数値の把握は時間がかかります。とりあえずは、「美術資料」として登録している資料の総数を記入しました。

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	25
移動展等	1
貸 出	30

●コレクション価値を高める活用法案、あるいは具体的な計画
個人的には、コレクション作品（資料）に関する調査・研究と、その成果を踏まえた活用が第一と考えます。調査・研究は、作品所蔵館の学芸員が担うことはもちろんですが、所蔵情報を広く発信して多くの研究者などに調査・研究を進めてもらうことも必要と考えます。また、活用は、自館や他館を会場にした展示会、出版物・論文、メディアなどを想定しています。実物が不特定多数の多くの人の目に触れる、という点では、資料の保存との折り合いを付けつつ、自館のみではなく、他館でも展示されることが良いと考えます（例えば、開拓記念館のように、「美術」とは一見無縁なイメージがあるところの資料が、「美術館」で展示されると、観覧者に与える印象は異なると思います。その積み重ねも、資料の価値を高める一つの方法と考えています）（三浦）

●コレクション価値を高める活用法案、あるいは具体的な計画
特に道内作家の作品に関しては、社会への積極的な情報公開による価値づけが必要であると考えます。そうした点では北海道新聞での連載は効果的であった（事実、問い合わせが数件あったほか紹介した作品を目当てとした来館者があった）。
作品だけでなく、来館者や市民が自身の眼で鑑賞を楽しみ考えることのできるように技術と情報を広めていくことが必要であると思う。

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%
油 彩	145	23.9
日 本 画	13	2.1
水彩・素描	159	26.2
版 画	112	18.4
彫 刻	115	18.9
工 芸	64	10.5
総 点 数	608	100

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	480	78.9
日 本	107	17.6
海 外	21	3.5
合 計	608	100

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	44
貸 出	7
そ の 他	（特別展での出品）97

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%
油 彩	67	10
日 本 画	8	1.2
水彩・素描	32	4.8
版 画	267	39.9
彫 刻	13	1.9
工 芸	1	0.1
デザイン	239	35.7
写 真	42	6.3
総 点 数	669	100

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	316	47.2
日 本	28	4.2
海 外	325	48.6
合 計	669	100

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	49
移動展等	8
貸 出	52
そ の 他	40

●コレクション価値を高める活用法案、あるいは具体的な計画
・巡回展などへの貸出しを積極的に推進することによって、美術館やコレクションの知名度アップはじめ、個々の作品にかかる調査研究や他館との交流の機会として活用。
・著作権の消滅した作品を企業の商品開発に提供するなど、作品の図版利用を積極的に推進することで、美術館の知名度を高める機会に出来ないか。

館名：北海道立近代美術館
開館年：1977（昭和52）年
作品収集費（年間予算）：必要に応じて北海道美術品取得基金を活用
常設展示室：有
広さ：1,777.9㎡
収集方針：
主として明治以後の北海道美術の流れから、各分野のすぐれた作品を系統的に収集・保存。また、同時に国内外の近代以後の作品、特にガラス工芸、バスキンを中心とするエコール・ド・パリの作品なども積極的に収集し、総合的な近代美術館を目指す。
まとまったコレクション：
・ジュル・バスキン（油彩・水彩・版画）223点。エコール・ド・パリ作品60点。
・浮世絵。高橋博信コレクション。江戸後期の美人画。歌川国貞をはじめ、歌川国芳、溪斎英泉らの優品。約500点。
・ガラス工芸（北海道2、日本359、海外678）1,039点。
代表的な作品：
1. ジュル・バスキン「花束をもつ少女」（1925-26年）
2. 林竹治郎「朝の折り」（1906年）
3. 岩橋英遠「道産子追憶之巻」（1978-82年）
4. エミール・ガレ「鯉文花器」（1878年頃）
5. ルイ・コムフォート・ティファニー「ランプ・きばなふじ」（1900-1910年頃）

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%
油 彩	726	16.8
日 本 画	253	5.9
水彩・素描	268	6.2
版 画	1,717	39.8
彫 刻	95	2.2
工 芸	1,259	29.1
総 点 数	4,318	100

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	1,774	41.1
日 本	1,269	29.4
海 外	1,275	29.5
合 計	4,318	100

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	643
移動展等	30
貸 出	391

●コレクション価値を高める活用法案、あるいは具体的な計画

- ①特別展のPRにとどまらず、美術・博物館のコレクションの存在そのものをプロモーションする手段を検討する（各種メディアの掲載、協会等との協働、バック・ヤード・ツアー等事業）。
②コレクション展示の視点をさまざまに検討する（好きな1点展、高額作品展等）。
③コレクションを目に触れる機会を増やす。まとまった各館のコレクションの交換展を開催。あるいは移動美術館を、道立館に限らず道内の美術館・博物館と共同で開催。

館名：北海道立釧路芸術館
開館年：1998（平成10）年
作品収集費（年間予算）：必要に応じて北海道美術品取得基金を活用
常設展示室：無
収集方針：
・自然をテーマとした美術作品
・写真などの映像芸術
・地域ゆかりの美術作品
代表的な作品：
・岩橋英遠「彩雲」（1979年）
・小林孝亘「tree」（2002-03年）
・森山大道「光と影」より（1981年）
・杉本博司「SEASCAPES」より（1986-89年）
・猪瀬光「INOSE Kou1982-2000」（1982-2000年）

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%
油 彩	34	38.6
日 本 画	10	11.4
水彩・素描	1	1.1
版 画	10	11.4
彫 刻	12	13.6
写 真	21	23.9
総 点 数	88	100.0

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	43	48.8
日 本	44	50.0
海 外	1	1.1
合 計	88	100.0

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	35 (フリーアートルーム)
貸 出	6
そ の 他	1組8点

●コレクション価値を高める活用法案、あるいは具体的な計画

<最近の身近な例から>
近隣の中学校から出前講座の要請があった際、作品・パネルも持参し、実際の展示作業を体験してもらった。
これが可能であったのは、生徒が7人と少人数であったこと、扱いが比較的安心な写真のコレクションを所蔵していることによる。いわば出前授業と移動美術館がドッキングしたようなものだが、さらに拡大できないか、検討したいと思っている。

館名：北海道立函館美術館
開館年：1986（昭和61）年
作品収集費（年間予算）：必要に応じて北海道美術品取得基金を活用
常設展示室の有無：有
広さ：約200㎡（可変/鶴亭記念室含む）
収集方針：
「道南の美術」
「現代美術（文字・記号に関する美術）」
「東洋美術と書」
まとまったコレクション：
金子鶴亭作品 田辺三重松作品 前田政雄作品 文字・記号の現代美術
代表的な作品：
金子鶴亭「井上靖詩 交脚弥勒」（1986年）ほか
田辺三重松「然別湖」（1958年）ほか
アンディ・ウォーホル「キャンベル・スープⅡ」（1969年）
ブルデル「自由」（1923年）「サッフォー」（1925年）ほか

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%	内・寄託作品数
油 彩	329	16.8	44
日 本 画	57	2.9	13
水彩・素描	29	1.5	2
版 画	369	18.9	2
彫 刻	32	1.6	0
工 芸	167	8.5	3
中 国 画	29	1.5	0
書	942	48.1	333
写 真	3	0.2	0
総 点 数	1,957	100	397

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	1,317	67.3
日 本	349	17.8
海 外	291	14.9
合 計	1,957	100.0

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	146
貸 出	108
そ の 他 (特別展での展示)	10

館名：北海道立文学館
開館年：1995（平成7）年
作品収集費（年間予算）：7,000,000円
常設展示室：有
広さ：407.86㎡
収集方針：
1. 北海道にゆかりのある文学者及び作品にかかわる資料を広く収集する。
2. 館の基礎資料として常備しておくべきわが国近現代文学にかかわる文献資料及び映像・画像・音声資料（外国文学及び近接領域の芸術を含む）を収集する。
3. 文芸評論・文芸研究図書・詩及び児童文学分野の図書の収集にも配慮して収集に当たる。
4. 将来の展示事業計画に沿って、関連資料の収集に当たる。
まとまったコレクション：
*有島武郎絵画作品 5点 *中澤茂絵画作品 17点 *小熊秀雄絵画作品 4点
*佐藤忠良挿絵原画 42点 *近藤潤一絵画作品 13点 *G.D.バヴリーシン挿絵原画 28点
*北海道新聞連載小説挿絵 36点 *掛川源一郎写真作品 30点 *綿引幸造写真作品 10点
代表的な作品：
有島武郎「有珠無名谷の煙」（1900年前後）
小熊秀雄「裸婦」（1930年代）
佐藤忠良「『原野にとぶ鶴』表紙画」（1978年頃）
G.D.バヴリーシン挿絵「ノロジカ」（2006年）

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%
油 彩	8	3.1
水彩・素描	172	67.7
版 画	17	6.7
彫 刻	4	1.6
写 真	47	18.5
書	6	2.4
総 点 数	254	100

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	206	81.1
日 本	16	6.3
海 外	32	12.6
合 計	254	100

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	11
貸 出	148

館名：北海道立三好太郎美術館
開館年：1977（昭和52）年／新築移転1983（昭和58）年
作品収集費（年間予算）：必要に応じて北海道美術品取得基金を活用
常設展示室：有
広さ：450.57㎡
収集方針：札幌出身の画家・三好太郎の作品と関連資料。
まとまったコレクション：三好太郎作品251点。
代表的な作品：
「檸檬持てる少女」（1923年）「マリオネット」（1930年）「道化役者」（1932年）
「オーケストラ」（1933年）「飛ぶ蝶」（1934年）「のんびり貝」（1934年）

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%	内・寄託作品数
油 彩	86	34	2
水彩・素描	158	62	0
版 画	10	4	0
総 点 数	254	100	2

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	254	100
合 計	254	100

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	130
貸 出	63

館名：本郷新記念札幌彫刻美術館
開館年：1981（昭和56）年
作品収集費（年間予算）：なし
常設展示室：有
広さ：本館198.97㎡/記念館235.16㎡
収集方針：本郷新の作品及び資料の収集
まとまったコレクション：
本郷新の彫刻・絵画 ピカソリトグラフ（29点）
代表的な作品：
本郷新「わだつみの声」（1950年）「嵐の中の母子像」（1953年）

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%	内・寄託作品数
油 彩	125	6.8	18
水彩・素描	985	53	866
版 画	88	4.8	53
彫 刻	655	35.2	236
工 芸	5	0.2	1
総 点 数	1,858		1,174

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	1,749	94
日 本	36	2
海 外	73	4
合 計	1,858	

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	173
移動展等	60（4点×15回）
貸 出	1

館名：室蘭市民美術館
開館年：2008（平成20）年
作品収集費（年間予算）：なし
常設展示室：有
広さ：147㎡
収集方針：善意での寄附。本市ゆかりの作家の作品を受託。
まとまったコレクション：
絵画 西村貴久子（油彩・日本・デッサン）
伊藤正（油彩・デッサン）
熊谷善正（油彩・デッサン）
書 長谷川遼牛 加藤寿牛
写真 掛川源一郎
代表的な作品：
西村貴久子「F嬢」（1929年）「室蘭港」（1957年）「夜の仔羊部屋」（1980年）
伊藤正「鼓笛隊の少女」（1946年）「マダム・ヴァイオレット」（1978年）
「倉敷の屋根」（1985年）
掛川源一郎 有珠山噴火以後の軌跡・1977年～1990年シリーズ

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%	寄託作品数（外数）
油 彩	162	41.1	31
日 本 画	7	1.8	0
水 彩 ・ 素 描	79	20.1	5
版 画	6	1.5	0
彫 刻	6	1.5	0
書（拓本・刻字含む）	53	13.5	0
写 真	81	20.6	0
総 点 数	394	100.0	36

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	392	99.5
海 外	2	0.5
合 計	394	100

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	80
移動展等	40
貸 出	21
そ の 他	13（他庁舎での展示）

●コレクション価値を高める活用法案、あるいは具体的な計画

公共施設において作品を積極的に展示利用し、コレクション全体の活用を図り、作品が市民の目に触れる機会を増やすよう努めている。

館名：紋別市立博物館・まちなか芸術館
開館年：紋別市立博物館 2002（平成14）年／まちなか芸術館 2008（平成20）年
作品収集費（年間予算）：なし
常設展示室：有
広さ：374.64㎡（まちなか芸術館常設展示室）
収集方針：
郷土にゆかりのある作家の作品資料
まとまったコレクション：
村瀬真治の絵画 齊藤顯治の彫刻
代表的な作品：
村瀬真治「彩りの朝」

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%
油 彩	41	20
日 本 画	96	46.8
水彩・素描	3	1.5
版 画	4	2
彫 刻	27	13.2
工 芸	34	16.5
総 点 数	205	100

●地域別作品収集状況

地域	合 計	%
北海道	177	86.3
日 本	26	12.7
海 外	2	1
合 計	205	100

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	68

館名：夕張市美術館
開館年：1979（昭和54）年
作品収集費（年間予算）：なし
常設展示室：有
広さ：610㎡
収集方針：
地元出身者または地元で顕著な美術活動をおこなった画家、書家、彫刻家などの作品。その文脈と関連する作家作品。
まとまったコレクション：
炭鉱という産業構造により発展した町であるため、そこで働いた者が描いた町の特徴的な景観を表した風景画が多い。また文化育成のリーダーとなり普及のために尽力した画家、書家のまとまった作品群がある。
他に計画により年次購入した斎藤清の版画作品。また郷土出身コレクターからの一括絵画寄贈作品がある。
代表的な作品：
佐藤忠良「母の顔」 山内壮夫「労働のモニュメント」 斎藤清「会津の冬シリーズ」
森熊猛「諷刺漫画シリーズ」 藤根星洲「開作」 松本春子「いはばしる」
小林政雄「夕張風景」 畠山哲雄「坂のあるまち」 薦子葉「静物」
村上善男「津軽・赤倉山」

●平成19年度（美術）作品収集状況

分野	作品総数	%
油 彩	257	33
日 本 画	9	1
水彩・素描	69	8
版 画	41	5
彫 刻	13	2
書	87	11
写 真	250	32
工 芸	61	8
総 点 数	787	

●地域別作品収集状況

地域	合計	%
北海道	481	61
日 本	246	31
海 外	60	8
合 計	787	

●所蔵作品活用状況（平成20年度）

形式	点数
常 設 展	113
移動展等	28
貸 出	11

●コレクション価値を高める活用法案、あるいは具体的な計画

・地域の学校、集会所などにおいて移動美術展を開催し市民への公開機会を拡大する。指定管理運営となりグリーン期のみの開館となっているが、今年はオープン30周年にあたるので、経費を捻出し記念行事を開催する予定。

ワークショップ「美術館コレクションを活かす3つの方法」

日時：2009（平成21）年3月6日（金） 10：00～11：20

会場：北海道立近代美術館 造形室

スケジュール：

10：00	グループ内 ディスカッション	グループ名決定。 リーダー（進行）＋プレゼンター＋ライター選定。 アイデアだし（付箋記入）。 分類する。
10：15		
10：30		
10：50	用紙記入	
11：15	グループ別発表	コーヒー・ブレイク。
11：45	討議	他グループへの質問、確認。

グループ編成：所属はワークショップ実施当時。

A

磯崎亜矢子	西村計雄記念美術館学芸員
大下 智一	北海道立函館美術館主任学芸員
鎌上 壘	中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館学芸員
雁原 郁美	木田金次郎美術館
佐藤 幸宏	北海道立近代美術館学芸第二課長
中谷 麻美	洞爺湖町教育委員会 学芸員
福地 大輔	北海道立釧路芸術館学芸員

C

石尾乃里子	北海道立近代美術館学芸員
釜沢 恵子	鹿追町立神田日勝記念美術館学芸員
小黑 春香	紋別市立博物館学芸員
笹野 尚明	前札幌芸術の森美術館館長
新明 英仁	北海道立近代美術館学芸第一課長
瀬戸 厚志	釧路市立美術館学芸員
苦名 直子	北海道立三岸好太郎美術館学芸員

E

佐藤 友哉	北海道立近代美術館学芸副館長
佐藤由美加	北海道立近代美術館主任学芸員
鈴木 幸人	北海道大学大学院文学研究科准教授
蘭部 容子	北海道立帯広美術館学芸員
光岡 幸治	北海道立旭川美術館主任学芸員
宮井 和美	モエレ沼公園学芸員
門間 仁史	関口雄揮記念美術館学芸員

B

浅川 真紀	北海道立近代美術館学芸員
岩崎 直人	札幌芸術の森美術館学芸員
岡部 卓	木田金次郎美術館学芸員
斎藤 傑	三浦綾子記念文学館副館長
苦名 真	北海道立近代美術館学芸第三課長
樋泉 綾子	札幌芸術の森美術館学芸員
星田 七重	市立小樽美術館学芸員

D

井内佳津恵	北海道立近代美術館主任学芸員
井上みどり	札幌彫刻美術館学芸員
古道谷朝生	網走市立美術館学芸員
佐藤 敬爾	市立小樽美術館館長
竹村 資子	荒井記念美術館学芸員
寺嶋 弘道	北海道立文学館学芸主幹
三浦 泰之	北海道開拓記念館
吉崎 元章	札幌芸術の森美術館副館長

F

浅川 泰	北海道立近代美術館学芸部長
岡田 綾子	モエレ沼公園
久米 淳之	北海道立近代美術館主任学芸員
渋谷 綾香	北一ヴェネツィア美術館学芸員
土岐美由紀	北海道立旭川美術館学芸員
松田 宏介	室蘭市教育委員会 学芸員
吉田 豪介	前市立小樽美術館館長



ディスカッション風景



グループ別発表

「美術館コレクションを活かす3つの方法」

Aチーム レッドカーペット

1. 場の転換
2. 経済的活用
3. 人の転換
4. 付加価値を高める
5. めだて！

活かすキ・ワード	アクション・プラン1	アクション・プラン2	アクション・プラン3	アクション・プラン4	アクション・プラン5	アクション・プラン6	アクション・プラン7
1 旅	展示機会のない作品は学校等に寄贈。	展示機会のない作品はその作家にゆかりのある美術館に寄託。	展示場所を変える。ロビー展 貸出 etc.	町じゅうの施設などに展示。	ありきたりだけど露出をふやす。→展示機会	他館との連携/複数館のコレクションの合体。	出張展覧会
2 金	企業のカレンダー等の図版に使用してもらう	企業等に貸し出して収益事業にする	所蔵品のミュージアム・グッズ展開	充実させたい 金 をくれ！	グッズ展開	キャラクター化する (宣伝用マスコットみたいな…)	
3 視	地元大学の授業・講義の題材として利用。(常設展)	市内の小・中学校に作品を巡回展示する。	市民や学生など部外者を参加させてコレクション展示を行い、新たな視点を引き出す。	出前展覧会			
4 探	絵画教室とか、彫刻教室、美術館コレクションに関する造形教室	ワークシート制作。クイズ、絵の解説、ウラ話的な。	地元作家のアーティスト・トークを定期的に開催。	web 上に作品解説アップ。			
5 輝	映画化！	出版！	地元FM放送局の活用。				

Bチーム WE are Hokkaido

1. HOKKAIDO is NUDE / 心のヌード in N.Y.
- ★ヌード：
新鮮な見方、新たな挑戦、荒削り、向こう見ず、原石、フロンティア精神、手つかずの自然、新たな地平をひらく

活かすキ・ワード	アクション・プラン1	アクション・プラン2	アクション・プラン3	アクション・プラン4	アクション・プラン5	アクション・プラン6
1 自覚	まず自館の作品を見直してみる。	予算減により特別展が開けなくなるといった状況を逆にチャンスととらえ、コレクションの調査・研究・価値づけを行う。	初心にかえる。自信を持つ。	自分の館のコレクションを自信をもって押し出すことが第一。		
2 転換	美術の概念以外からの発想。	新しい観客層にむけて見せ方を変化させる。	楽しみながら発想する。	ひとつの解釈にこりかたまらない。	さまざまなテーマを考え、異なるコンテクストに作品を置くことで新たな魅力を引き出す。	作品の魅力の再発見。異なった文脈との出会いを作る。
3 連携	他の館のコレクションの意味を知る。	「北海道のコレクション」全体の魅力を伝える。「北海道っていいな」	努力の成果を持ち寄る。	駅や空港でプレゼン・展示する。	個々のコレクションをつなぐ。	

Cチーム 流氷

1. 作品の情報を共有する。
2. 展覧会プランの多様化をはかる。
3. 観覧者に対するサービスを充実させ、継続的な利用をはかる。

活かすキ・ワード	アクション・プラン1	アクション・プラン2	アクション・プラン3	補	補	補	補
1 データ	作品・作家に関する視覚的なプログラムを作る。売り込む。(絵本・CM、アニメ、カレンダー)	データのネットワークを作成	画像等をひろく公開。動画の活用	映像プログラム作成、館内・出張で活用	コレクションの評価・解説に外部の声を取り入れる	マニアクな情報を提供してしまう	
2 展示	移動展・交換展・名品展の開催。	市民や外部からの意見を取り入れた展示	分野を越えた(自然科学や博物資料)展覧会 共同企画展	全道的美術館の名品展を巡回	この会のメンバーが推薦する展覧会を移動展	市民が選んだ作品を展示する	お茶、お花などで使わせる
3 イベント	コレクションに関連したワークショップ	実物を使ったイベント	(展示室以外で)本物にまじかに触れる講座	子供たちにカレンダーをつくらせる	本物の作品をみせながら講座する	コレクションに関連するワークショップ開催	CMをつくる
4 グッズ	研究・所蔵作品集の出版またはネット公開	ミュージアム・グッズをつくる	関連メニューをつくる	町や商店街のカレンダーにする	美術館物語をつくる(絵本にする)		

Dチーム “セマダ” SEMADA (だ・ま・せのアナグラム)

1. サブタイトルをつける。言葉で発信(だませ?)
2. 愛着心と呼び起こす
3. 館からの脱出
4. コレ知って！

活かすキ・ワード	アクション・プラン1	アクション・プラン2	アクション・プラン3	アクション・プラン4	アクション・プラン5
1 愛着	ホーム・パーティ	コレクション・ファン・クラブ	作品のファン・クラブ		
2 出張展	交流の場 作家と人 小さなイベント 展覧会	外に出る	学校に貸し出す	貸出可能作品の収蔵による一般貸出事業	コレクションを市長店接室に貸し出す。出前美術館。
3 サブタイトル	言葉でだます。	キャッチコピーによる発信。	イベント(周年事業等)を作りだす。		
4 見る側	貸切美術館	1日限りのその人のための展示。	収蔵庫展 コレクションであふれているのを知ってもらう。		
5 コレ知って！	コレクションを知ってもらう。	小説・映画・漫画の舞台に登場。(美術愛好家以外へのアピール)	常設を互いにかえてみる。	北海道美術検定	

Eチーム 心の充実

1. 活かすとは何か？
2. ターゲットは？
3. 観光客

活かすキ・ワード	アクション・プラン1	アクション・プラン2	アクション・プラン3	アクション・プラン4	アクション・プラン5	アクション・プラン6
1 地域って？	コレクションについて地元は知っているか？	地域がわかる作品	いついっても代表作品がある	多くの収蔵品をみせる	地元の支持 全国で有名でも地元で無名	近郊の美術館
2 情報発信	世界へ	地域性 国際性	美術館のネームバリューをあげる			
3 経済効果(周辺)	客客エリア	市民と観光客	行政 観光協会			
4					心の充実	死蔵

Fチーム どうもありがとう

1. 作品と出会う場を多様化させる
2. 企画の工夫
他のコレクションや他者とのリンク
3. 作品のプロモーション
メディアの活用

活かすキ・ワード	アクション・プラン1	アクション・プラン2	アクション・プラン3	アクション・プラン4	アクション・プラン5	アクション・プラン6	アクション・プラン7
1 Yes, We Can! 出張ミュージアム	美の宅急便。小型バスでいつでも展示・解説。	地域の学校の学校祭に移動美術館。	道内各館との交換による移動展。	たとえばイサム・ノグチのあかりなど1か月〇円で貸出家庭で楽しんでもらう。	学校に(約1か月とか)期間で貸し出す。	モエレの模型をもうひとつ作って貸出。	トラベリングエキシビションの展開 作品と出会う場を多様化させる。場をつくるものを貸し出す
2	ギャラリー・トレイン・バスを定期的に運行する美の旅。北海道周遊ギャラリー・トレイン	マスになるコレクションでパッケージにする 道立全体、道内など → 売る、ギャラリーもどる。					
3 Yes, You Can! コレクション変化	展示企画のリフレッシュ → デマ→死蔵品展→みたことない作品展	過去に展示されていたものを参考に再現して	企画の工夫 デマ 彼のコレクションを加える ゲスト・キュレーター 一般参加型	他のコレクションを加える/新しい並べ方をみいだす	市民に投票してもらい1か月ごとに1点選んで展示する	展覧会を見てももらったあとに一番気に入った作品を投票してもらってなぜ好きか書いてもらう HPで公開	
4 ミュージアム・プロモーション メディアが主役	コレクションTシャツをグッズ化 フォトコンテスト	「今週の1点」コーナーをTVで放映(新聞連載のTV版)	コレクションのスターをつくる 露出・解説の掘り下げ方の工夫	プロモーションとして検討一新聞連載、カレンダー、ポスター等全体で	展示室をイベント会場として貸出(作品がみられる)	コレクション1点をめぐるTV番組づくり(美の巨人のような) 地元TVとタッグ	北海道全域の美術館サイト・博物館(美術分野)の情報 コーナー・HP作成

札幌芸術の森美術館のコレクションについて

札幌芸術の森美術館学芸普及係長

岩崎 直人

札幌市による初の公設美術館として、1990年9月29日、「札幌芸術の森美術館」はオープンした。その開館記念展は“近代彫刻の父”ロダンの生誕150年も同時に祝す大々的な展覧会であった。これを先鋒に、当館は彫刻をひとつの軸として歩いていくことを声高に宣言したと言ってよいであろう。このような彫刻重視は、既に当館開館の4年前に誕生していた「札幌芸術の森野外美術館」の存在が大きく関係している。緑豊かな丘陵地帯に彫刻作品を多数設置する、言わば、彫刻庭園である。これにより、彫刻は当館の基本性格として策定された。そればかりでなく、必然的に作品収集方針にも盛り込まれることとなった。「芸森」といえば、“彫刻の美術館”というイメージは、とりわけ道外の美術館や美術関係者に触れたとき、その浸透ぶりを実感する。明確に指針を示し、ビジョンを定めて活動してきたひとつの成果の現れと言えよう。

さて、当館（すなわち札幌市）がこれまでに収集してきた美術作品は1,117点を数える（2010年2月28日現在）。これらを取得方法別に分けると、受贈が909点（81.4%）、購入が203点（18.2%）、ほか賃借が5点（0.4%）^{*1}である。

受贈に至る経緯は、関係作家もしくはその遺族からの寄贈、蒐集家からの寄贈というように、他館とさほど大きな差異はなかろう。一方、購入については、他館にはあまり見られない特徴がある。作品購入予算額というものは、一般に景気の動向に左右されやすいものであり、現に昨今の不況の煽りを受けて、大幅な削減、さらにはゼロという声もよく耳にする。当館もゼロである。が、当館の場合、併設する「札幌芸術の森野外美術館」の建設状況に応じて作品購入費が決定していたというやや特殊な事情を持つ。いや、厳密には、建設に乗じてその全体予算から費用を捻出していたと言う方が正しい。具体的には、1999年のダニ・カラヴァン作品《隠された庭への道》の設置をもって、野外美術館は工事完了と相成ったため、作品購入も当年の八木伸子作品《冬》を最後にしばらくの間なくなった。久し振りの購入は、やはり野外美術館内に付随する新施設「佐藤忠良記念子どもアトリエ」の建設の時であった^{*2}。

振り返って、受贈に依るところが大きい作品収集ではあったが、この20年の間に、質量ともに着々とその充実を図って来られたのではないと思う。彫刻史の観点からも、札幌および北海道美術史の観点からも、何本かの系統が張り巡らされた作品収集が形成されているものと自負する。また、その間、大型のコレクションへと結びつく奇跡的な出会いもあった。小品なが

らも206点によって北海道絵画の歴史を展観できる坂野コレクション、ユニークな造形が際だつ118点のアフリカの仮面・彫刻の橋本信夫・邦江コレクション、四谷シモンを被写体に10人の写真家がとらえた45点の写真群など。また、18点とはいえ、片岡球子作品がまとまって寄贈されたのも日本画の薄い当館にはとても刺激的であった。このように、開館当初には筆頭に位置づけられていた彫刻にあまり執着し過ぎることなく、柔軟にコレクションの形成に対応してきたことが、現在の充実につながっているとも言えそうである。

コレクションは館の骨格をなす。それが系統的に収集されればされるほど、その骨は堅固なものとなり、ユニークなものが時折加わっては新たな翼手が形成される。それをいびつなものにするか、意味あるものとして肉付けし、血をいかに流すかは我々学芸員の腕の見せ所となろう。また、適温適湿の暗室にひたすら眠らせ続けていてはまさに宝の持ち腐れである。当館は野外美術館を常設展示スペースと位置づけているが、残念ながら、館内には常設展示室を有しない。ゆえに、コレクションを常時披露できる環境になかった。しかし、指をくわえて待っていても変化はない。既存の講堂を改装し、B展示室と称し、常設展示室の役割をここに持たせた。

そして、本年、当館はついに20周年を迎えた。この節目を飾る記念展の第一弾に「芸森の名品」と題した所蔵品展を持ってきた。出品点数は150点。全コレクションの1割強に過ぎないが、各寄贈者からの作品は少なくとも1点を挙げ、寄贈者をほぼ漏らすことなく紹介している。先述したように、当館は受贈がコレクション形成の軸である。それに対する感謝の念を抱き続けること、またそうして収集された貴重な札幌市民の文化財産を護り継ぐこと、且つ広く紹介することに努めることを、この展覧会を通じて表明していたのである。

*1 野外美術館の作品も札幌芸術の森美術館蔵品として数える。なお、賃借というのは、野外美術館に設置されているグスタフ・ヴィーゲランの彫刻のことを指す。オスロ市より25年間の期間限定で借用している。

*2 2007年、2008年の二度に渡って佐藤忠良関連作品39点を購入。

中村善策展の学校教育との連携について

市立小樽美術館学芸員(主査)

星田 七重

美術館と学校教育との連携は、課題に上がっていきながらなかなか実現できず、「中村善策の全貌展」(2008年)の準備段階で、この機会にぜひ学校に働きかけたいと思い、鑑賞教育に熱心な中学美術の先生を探しました。中村善策は本市出身で作品の多くは地元の風景であり、まさに小樽のシンボルともいえるべき画家なので、代表作が網羅されるこのタイミングを逃すことはできないと思いました。市内中心部にある小樽市立松ヶ枝中学校と打合せの際、担当教諭から美術の授業時間数が激減し、2コマ続きの授業が実施しにくい、じっくり作品を制作するような従来の授業が維持できず、今後は「鑑賞教育」が主体になるだろうと、学校の現況をお聞きしました。

当館から提案したアイディアは4つ。このなかから可能なプログラムを選択し、学校長の許可、職員会議で承諾を得るなどの手順を経て、年間スケジュールを調整し時間割を作成していただきました。新年度、「総合学習」「美術の時間」「文化祭」を使って、4つの課題に取り組みたいという意向が伝えられました。同校の総合学習はその目標に「社会や人とのかわりに目を向ける」を掲げ、「小樽を知ろう」という項目を設けています。「地域を知り、そこに住む人々の生き方を学ぶ」学習の中で、1年生を対象に中村善策をとりあげていただくことになり、会期を大きく超えた6月～11月までの連携事業となりました。

プログラム1 写生地めぐりと写生会

生徒たちにはあらかじめ事業の流れを説明しており、最終的に文化祭や美術館で発表することも理解しています。写生地は市内の随所にあり、事前にコース選択のための下見をしたうえで、張碓・奥沢・祝津を選びました。1)「張碓」芸術院賞受賞作の現場で、個人の敷地のため通常は立入りが許されない。小樽市の鳥であるアオバトが飛来する全国でも珍しい場所です。2)「奥沢」原生林が群生する豊かな自然がそのまま保存。水辺の事故で立入禁止でしたが、数年ぶりに一般公開が再開されるのに合わせました。3)「祝津」小樽の写生地の筆頭に上げられ、360度どの角度からでも変化に富んだ構図が得られます。

移動が広範囲にわたるため貸切バスを用意しました。写生地を訪ねることで、風景画の宝庫といわれる小樽に住みながら普段は見過ごしている街の魅力を見直す機会となりました。予想に反し中村善策の油絵を見たことがある生徒はほとんどおらず、市民会館の緞帳を描いた人だというわずかな知識があるだけでした。各現場で中村善策とはどういう画家なのか、写生地にまつわるエピソードや複製パネルで作品解説を行いました。壁新聞作りの素材集めの意味もあって、解説の際にはメモやテープを取るなど熱心に聞いてくれました。解説後、鯉御殿の崖の上に立ち、善策が描いた同じ場所で実際にA4サイズの鉛筆スケッチをしました。30分のスケッチ時間は短く、天候に恵まれたこともあり、楽しくてまだ描いていたかったという感想がありました。



写生会



写生地めぐり

プログラム2 ワークシートを使った作品鑑賞

写生地めぐりから3週間おいて、ワークシートを使いクラスごとに中村善策展を観覧し作品理解を深めました。現場の印象は鮮明に残っており、絵画と比較して見ることができます。展示作品の大きさ、色彩の鮮やかさは生徒の想像以上であったようです。先に現場を見学したことで、実際の風景と創作との違いがわかり、美術作品と出会ったときの驚きはより大きなものでした。シートの設問内容は普段生徒と接している担当教諭の目線を取り入れ、クイズ形式で年表や解説を読むと回答できるようなものも含め、巻末には、一番印象に残った作品を自身の感想を添えて記述してもらいました。

プログラム3 善策さん壁新聞を作ろう

北海道新聞NIE推進センターへ依頼し、記者の心構え、新聞のレイアウト(写真と文章の配置)、取材の仕方(インタビューをやってみよう)に絞って、北海道新聞社主催の壁新聞コンクール受賞作を



壁新聞のための授業

作例として講義いただきました。作品から受けた感動を言葉に置き換える訓練を、鑑賞授業のなかに盛り込みたいという意図です。新聞に掲載する内容には、写生地めぐりや解説、自分が描いたスケッチも素材の一つになっています。3クラス90名合同で人数が多いため、体育館で実施した1時半の一斉授業でした。同日、中村善策ゆかりの人々に直接生徒が取材し、原稿を書き起こすという展開にし、インタビューを受ける方には、親族、後輩の画家、画材店主、定宿の女将といった画家を良く知る人々をお願いしました。実際の編集レイアウトは後日文化祭準備の時間を使い、6人ごとの班単位で制作。総合の時間らしい職業体験的な授業であったため、学校側で公開授業とし保護者参観日に当てました。

プログラム4 文化祭・美術館での展示

完成した壁新聞は文化祭で展示発表しました。壁新聞を見ると、中村善策という全員共通のテーマであっても、取材対象やその班が選んだテーマによって、個性的な新聞ができあがりました。事業の締めくくりとして当館では、文化の日を含めた11月の常設展に一連の授業の成果、写生会で描いたスケッチ、壁新聞、生徒が自ら選んだ中村善策作品に感想を添えて展示しました。

すべての取り組みはマスコミを通じて毎回報道され、事業自体は評価されました。しかし、現実的には「我が校でも取り組みたい」という声は上がらず、展覧会の一般入館者数の伸びと比較して小中学生は横並びでした。総合学習の見直しはこれから、今後どのような提案を受け入れてもらうのは、一層難しくなるでしょう。

今回、作品鑑賞だけでなく、作者の生涯や背景を、ゆかりの人々から聞き取り調査して新聞作りに仕上げるという、深みのある学習に発展させることができました。将来小樽を故郷として、やがては巣立って行く生徒たちの心に、何かを残したい。今後どうやって、他校に広げていけるかを課題とします。

(写真：小樽ジャーナル提供)

日本美術の評価における美術館の役割

北海道大学大学院文学研究科准教授

鈴木 幸人

大きなテーマを与えられまして、日本美術、評価、美術館、コレクションなどのキーワードを結びつけることが望まれているようですが、学芸員として経験にもとづく自分の思いを申し上げることといたします。

私は1993年から2004年まで大阪市立美術館で学芸員をしていました。企画担当した展覧会は、「煎茶展」(97年)、「咲くやこの花、絵画展」(98年)、それから例の80日で60万人の「フェルメール展」(2000年)。「天神さまの美術展」(01年)は一ヶ月で15万人、「円山応挙展」(03年)は6週間で26万人。わざと動員数を述べましたが、こういう規模の仕事をずっと、いずれも巡回展の受け入れではなく、大阪市美の企画展として、大阪市美の特性(コレクション、地域性、歴史…)を活かして展覧会に仕立てていったことは、美術館活動のひとつの理想的な形としてまず申し上げておきたいところです。

大阪市立美術館は、大正時代から計画があって、古今東西の美術を紹介する目的で1936年(昭和11年)に開館します。収蔵品の白眉、阿部コレクションは東洋紡の阿部房次郎氏が集めた世界的な中国書画コレクションで、その背景には京都シナ学の内藤湖南、長尾雨山がついていました。ちなみに大阪市は近代美術館もつくろうとしていますが、これは佐伯祐三作品で著名な山本発次郎コレクションがその基であり、また大阪市立東洋陶磁美術館の安宅コレクション。こちらは経済界がいかに美術界、美術館、ひいては文化行政とも関わっているかが骨身に染みてわかる事例かもしれません。このように大阪市の美術館事業は個人コレクションによってその骨格がつくられてきた側面をもっています。

ここで問題は、現在、それらのコレクションの意味がわかりにくくなっていることのように思われました。たとえば阿部コレクションの意味と意義が私にはわかりにくかったのです。

同じようなことは、広く見渡しますと、阪神間の財団や私立の美術館のコレクションにも感じられました。すなわち中国書画、陶磁器、青銅器、文房具がたくさん所蔵されていますが、はっきり言ってこういう傾向の作品は今の美術愛好の中では主流ではない。少なくとも展覧会をやって大量の観客動員が望めそうではない。

しかし、こうしたコレクションの形成は、中国趣味の書画、陶磁器、青銅器…が高い評価を得て集められたものであること、とりわけ戦前までたいへん隆盛していた「煎茶」の力が与って大きかったことなどがわかって来ました。そうした評価や意味が今の私たちにはわかりにくくなっていたのです。

近世から近代の煎茶文化をテーマにした「煎茶・美とのかたち」展のきっかけにこうした問題意識があったことは事実です。展示作品としては、煎茶道具、書画、陶磁器、青銅器、400余点で煎茶文化を正面から捉えた初めての試みでしたが、ここで私たちは美術館のコレクション自体を研究対象に、展示のモチーフにしようと目論んだことになります。先述の阪神間の私立美術館コレクションは、煎茶の茶会で使われていた、飾られた書画や陶磁器、青銅器が生き残って、お茶を飲むための急須、涼炉、茗碗…、そういうものが消えてしまったのだということもできるわけです。

「美術史」が嫌い敬遠するのは「茶の湯」で、つまり美術史とは別の価値体系があるといわれます。煎茶展をとおしてよくわかったことは、当時(昭和初期まで)はいわば茶的な価値体系が一般的で、そこに美術史が別の価値体系として出てくる。そういうふうに考えればよいと思うのですが、今、私たちは茶の湯や煎茶の価値体系の方がわからなくなっている。そうであるから今度はそれを展覧会で紹介するという逆方向を試みたということです。

私が学芸員になるとき、美学の先生に言われた忘れられない言葉があります。

「学芸員の仕事は、作品の架け替えに尽きる。」

なるほど各館のコレクションはおそらくいつまでも不十分でしょう。だからダメなのではなくて、しかしだからこそ常に新たなコンテキストに作品を並べかえて、作品の今まで知られていない側面をあらわにすることが学芸員に求められている、これが「架け替え」の意味だと解釈しています。

私の話はこれで終わりますが、学芸員の仕事は終わりません、正しくは終われないはずですが。今回うまくいったと立ちどまてはいけません。その展示を壊して次に進まないといけない。作品にはさまざまな側面があり、更新し続けていかなければならないからです。私はそれができなくなったので学芸員を辞めてしまいました。ちょっと説教調になりましたけれども、すでに学芸員ならぬ教師の癖とあしからずご海容いただきたいと存じます。

最後に蛇足。先の先生、生粋の京都人ですが、もう一言教えてくださいました。「事務方、身銭を切って飲ましや」と。こちらは今でも、その意をくんで、実行しております。

室蘭市民美術館

室蘭市教育委員会学芸員

細川 義信

館の概要

室蘭市民美術館は、美術作品の展示や体験学習会等の実施をとおして地域における文化芸術の振興を図るため、平成20年10月1日に設置されました。

室蘭を含む西胆振圏においては、昭和50年代に道立美術館の誘致運動を契機に、その後も室蘭市に美術館設置を求める市民運動がなされていました。その後継団体である「室蘭に美術館をつくる市民の会」（現在は「室蘭市民美術館をささえる会」に改称）が、ボランティアとして美術館の運営をサポートすることとなり、市民の願いであった美術館が誕生したのです。なお、館長には、長年にわたり美術館設置運動をリードしてきた小原章嗣氏が就任しました。展示室は常設ギャラリーとオープンギャラリーがあり、オープンギャラリーについては、美術館の事業以外の期間であれば、個人や団体での利用も可能です。

所蔵作品

室蘭市民美術館は、作者又はテーマが室蘭地域とゆかりのある作品を中心に、絵画、彫刻、書、写真など総数約350点を所蔵しています。

その中でも、本市出身の女流画家、西村貴久子（1905～1982年）の作品群が充実しています。所蔵作品のひとつ『F嬢』は、1929（昭和4）年に第10回の帝展に初入選を果たした出世作で、画面からは、戸外で見る色彩や光の効果を的確にとらえようと

する画家の若い息吹が感じられます。女流画家の珍しかった当時、この入選は話題となり、新聞等でも報道されました。この作品はしばらく所在不明となりますが、ご遺族が苦勞の末に探し当てて1985（昭和60）年に購入された後、同年、本市に寄贈されました。

その他、写実絵画で知られる伊藤正や、室蘭市長も務めた書家、長谷川遅牛の作品も豊富に所蔵しています。

市民に支えられる美術館

室蘭市民美術館の特徴のひとつとして、市民ボランティア「室蘭市民美術館をささえる会」が運営をサポートする点が挙げられます。

「室蘭市民美術館をささえる会」の活動内容は、各展覧会における展示作業や場内の監視、企画への参加など多岐に及び、これまでに「開館1周年記念『高野次郎展』」など、多くの事業を共に創り上げてきました。また、同会は、所蔵作品はがきの販売やバザーなどの益金を、活動資金に充てています。

室蘭市民美術館は平成22年1月現在、来館者が3万人を超えるなど、順調な推移をみせています。これからも地域に密着した美術館として気軽に美術作品を鑑賞していただき、体験学習やギャラリートークなどを通して人と人との交流を生むことができるよう、努力してまいります。



西村貴久子『F嬢』1929年 油彩・キャンバス



高野次郎展ギャラリートークの様子

洞爺湖芸術館

洞爺湖町教育委員会学芸員

中谷 麻美

施設の概要

洞爺湖芸術館は洞爺湖畔に立地し、2008年、旧洞爺村役場庁舎を改築して開館しました。庁舎時代の趣を活かした2階建てで、「洞爺村国際彫刻ビエンナーレ作品」「砂澤ビッキ作品」「並河萬里作品」「大正・昭和の初版本コレクション」を展示しています。

洞爺湖とアートの出会い

洞爺湖の周囲43kmを囲む「洞爺湖ぐるっと彫刻公園」は、58基の野外彫刻がいつでも鑑賞できる公園です。洞爺湖を囲む3町村が共同で取り組んだこの整備事業は、設置町村と彫刻作家、あるいは美術関係者とのつながりを生み、これがきっかけとなって1993年から「洞爺村国際彫刻ビエンナーレ」が開催されるようになりました。近年の彫刻は、大型化・屋外設置、あるいは鑑賞者を文字通り作品空間に取り込み、体感させるインスタレーションが主流となりましたが、この公募展はあえて『手のひらの宇宙』をテーマにし、最小の空間でいかに構想を具体化できるか、という創造の原点を見つめ直すものでした。受賞作品を中心に作品収集を続け、2007年までに各国から出品された約90点の作品を所蔵することができたのです。

砂澤ビッキ作品の収集

収集した作品を常設展示すること、そして芸術を核とした地域文化の形成を目指し、村では展示施設整備の構想を練りました。その中に、世界各国の現代彫刻作品だけではなく、北海道の風土を象徴するような作品も求められたのです。

砂澤ビッキ（1931～1989）は北海道に生まれ、木の生命感を引き出しつつ巧みな構成力を提示する作品を制作し、日本の現代彫刻に大きな影響を与えた彫刻家です。ビエンナーレ展の審査員を務めていた先生の紹介を通して、ご遺族から晩年の彫刻作品を購入、また大型彫刻作品・グアッシュ・製作工具等の寄贈を受けることができました。

今後の課題

「洞爺湖ぐるっと彫刻公園」に始まり、「洞爺村国際彫刻ビエンナーレ」「砂澤ビッキ作品収集」など、当初から行政主導の地域づくりの一環として取り組まれてきた芸術文化事業ですが、洞爺湖芸術館が開館したことによって、友の会を中心とした地域住民が積極的に芸術文化事業の企画運営に携わることが可能になってきました。地域に根ざした美術館を目指すために、住民主体の活動をより活発にし、地域に定着させていくことが、所蔵している作品の再評価とともに重要な課題であると考えています。



洞爺湖芸術館

仙台藩白老元陣屋資料館～豊富な関係資料～

白老町教育委員会教育課主幹 仙台藩白老元陣屋資料館長・学芸員

武永 真

仙台藩白老元陣屋設置の経過

安政元～2（1854～55）年、幕府は約200年にわたる鎖国政策に終止符を打ち、アメリカ・ロシアなど列強諸国との間に和親（通好）条約を結びました。しかし北辺の緊張は依然として続き、特にロシアの南下を警戒した幕府では、松前藩のほか東北諸藩（弘前・盛岡・秋田・仙台・庄内・会津）に命じて蝦夷地を分割警備させ、各藩では24の陣屋を築き、沿岸の警備にあたりました。

このうち仙台藩では、白老から襟裳岬を経て、国後・択捉までの東蝦夷地を守備範囲として、元陣屋を勇払（苫小牧市）に置くよう指示されましたが、出入司兼公儀使三好監物（1814～69）を派遣し現地調査の結果、白老を適地として幕府に承認を求め、同3（1856）年春に陣屋構築にとりかかり、同年秋には一応の完成をみました。同藩では白老に元陣屋、広尾・厚岸・根室・国後島泊・択捉島振別にそれぞれ出張陣屋を置いて、戊辰戦争の勃発した慶応4（1869）年までの12年間にわたり、多くの藩士たちが北の防人としてその任につきました。

元陣屋資料館と三好監物文書

仙台藩白老元陣屋資料館は、昭和59（1984）年10月、幕末の蝦夷地の姿をとどめる北海道有数の史跡公園、史跡白老仙台藩陣屋跡内に開館しました。

陣屋関係資料410点（うち文書は292点）のうち、約9割にあたる363点（同276点）は、陣屋設置にあたり蝦夷地を踏査し、大番頭・2代目御備頭として仙台陣屋を統治、北方の警衛に尽力した三好監物の子孫（横浜・仙台在住）より寄贈・寄託された文書・資料からなっています。

三好監物文書の種類

監物は、帰藩後、若年寄に就任（安政6年）、江戸や京都に赴き、天下の急、尊王攘夷に応ずべく、西郷隆盛・三條実美・品川弥二郎・山県有朋らと交流、勤王派として藩政の改革に参画しました。しかし強硬な佐幕派との争いに巻き込まれ、藩内で孤立、慶応4年自決しました。時に54歳でした。

遺族は妻ミツとの間に4男4女、そして母もと子。次男清篤は長男が早世したため家督を継ぎ、維新後左留太（日高管内門別）へ入植、5男清高は教師、6男清徳は神職となり、これらに関する文書も残されています。一方、監物は詩歌や書画にも秀で、松浦武四郎ら多くの文人との交際もありました。

このようなことから、三好監物文書は、以下のように大別することができます。



平成21年新着資料「仙台藩白老元陣屋之図」

①三好家私文書（記録・書簡など）	111点
②蝦夷地関係資料（往来文書・絵図など）	23点
③陣屋関係資料（警衛文書・絵図など）	23点
④藩政資料（維新関係文書・絵図など）	36点
⑤個人作資料（詩歌・書画など）	58点
⑥その他（明治以降の陣屋や監物に関する刊行物など）	25点

このように、北方の島々をも含んだ幕末の蝦夷地の動静に加え、国政をも垣間見ることのできる貴重な資料群から構成されています。

今後の展望

およそ300点にのぼる三好監物文書は『三好家文書仮目録』として、その概要が発表されています。さらに近年では、当該文書の解説をはじめ、詳細にわたる研究・調査も少しずつではありますが行われており、また修復作業も手がけられています。加えて、関係文書の購入も計画的になされており、幕末の陣屋史・北方史の全容解明も、目と鼻の先まで来ている、そんな状況にあります。

北海道美術館学芸員研究協議会会員名簿・規約・役員

■北海道美術館学芸員研究協議会会員名簿

平成22年4月現在（50音順）

浅川 真紀	北海道立釧路芸術館主任学芸員	gk2@kushiro-artmu.jp
浅川 泰	北海道立近代美術館学芸部長	yasushi.asakawa@pref.hokkaido.lg.jp
井内佳津恵	北海道立旭川美術館学芸課長	iuchi.katsue@pref.hokkaido.lg.jp
五十嵐聡美	北海道立近代美術館主任学芸員	igarashi.satomi@pref.hokkaido.lg.jp
石尾乃里子	北海道立近代美術館学芸員	ishio.noriko@pref.hokkaido.lg.jp
磯崎亜矢子	西村計雄記念美術館学芸員	mussee@topaz.ocn.ne.jp
井上みどり	本郷新記念札幌彫刻美術館学芸員	m.inoue-sapporo-mos@artpark.or.jp
今井里江子	札幌芸術の森美術館学芸員	imair@artpark.or.jp
今村 信隆	札幌芸術の森美術館	n_imamura@artpark.or.jp
岩崎 直人	札幌芸術の森美術館学芸普及係長	iwasaki@artpark.or.jp
上木 和正	夕張市南支所長	
大下 智一	北海道立函館美術館主任学芸員	ooshita.tomokazu@pref.hokkaido.lg.jp
岡部 卓	木田金次郎美術館学芸員	kidamuse@wmail.plala.or.jp
奥岡 茂雄*	札幌芸術の森美術館館長	okuoka@artpark.or.jp
小黑 春香	紋別市立博物館学芸員	hakubutu@city.mombetsu.lg.jp
角井千代絵	釧路市立美術館学芸員	ku611491@city.kushiro.hokkaido.jp
鎌上 隼	中原梯二郎記念旭川市彫刻美術館学芸員	r_kamagami@city.asahikawa.hokkaido.jp
釜沢 恵子	鹿追町立神田日勝記念美術館学芸員	kei-ks@ra2.so-net.ne.jp
鎌田 享隆*	北海道立帯広美術館学芸課長	kamata.takashi2@pref.hokkaido.lg.jp
亀谷 淳之	北海学園大学非常勤講師	kume.atsushi@pref.hokkaido.lg.jp
工藤 祐太	夕張リゾート学芸員	y-kudou@yubari-resort.com
黒田 格男	伊達市噴火湾文化研究所学芸員	norio-kuroda@city.date.hokkaido.jp
源藤 隆一	夕張市教育委員会主査・学芸員	ybrkik@city.yubari.lg.jp
河野 敏昭	滝川市美術自然史館館長	kono_toshiaki@city.takikawa.lg.jp
古道谷朝生	網走市立美術館学芸員	tomoo.kodoya@city.abashiri.hokkaido.jp
斎藤 傑*	三浦綾子記念文学館副館長	
斎藤千鶴子	北海道立文学館学芸員	saitou@h-bungaku.or.jp
笹野 尚明*	前札幌芸術の森美術館館長	
佐藤 敬爾*	市立小樽美術館館長	
佐藤 友哉	北海道立近代美術館学芸副館長	tomoyoshi.sato@pref.hokkaido.lg.jp
佐藤 幸宏	北海道立近代美術館学芸第一課長	satou.yukihiro2@pref.hokkaido.lg.jp
佐藤由美加	北海道立帯広美術館主任学芸員	satou.yumika@pref.hokkaido.lg.jp
柴 勤	北海道立函館美術館副館長	shiba.tsutomu@pref.hokkaido.lg.jp
渋谷 綾香	北一ヴェネツィア美術館学芸員	venezia-museum@kitaichiglass.co.jp
新明 英仁	北海道立文学館学芸主幹	shinmiyou@h-bungaku.or.jp
菅 訓章	神田日勝記念美術館副館長	sugakun@khaki.plala.or.jp
鈴木 正實*	札幌大谷短期大学美術科教授	
鈴木 幸人*	北海道大学大学院文学研究科准教授	yukkun@let.hokudai.ac.jp
関戸 恵	石狩美術館学芸員	gakugei@ishikari-museum.jp
瀬戸 厚志	釧路市立美術館学芸員	ku611491@city.kushiro.hokkaido.jp
園部 真幸	江別市教育委員会学校教育支援室参事	m.sonobe@city.ebetsu.lg.jp
園部 容子	北海道立帯広美術館学芸員	sonobe.yoko@pref.hokkaido.lg.jp
平 利弘	北海道立旭川美術館主任学芸員	taira.toshihiro@pref.hokkaido.lg.jp
高田 裕之	関口雄揮記念美術館副館長	h-takada@sekiyuchi-muse.jp
武永 真	仙台藩白老元陣屋資料館館長	jinya@town.shiraoi.hokkaido.jp
竹村 資子	荒井記念美術館学芸員	art@iwanai-h.com
地家 光二	北海道立函館美術館学芸課長	chike.kouji@pref.hokkaido.lg.jp
寺嶋 弘道	北海道立釧路芸術館学芸主幹	gk1@kushiro-artmu.jp
土岐美由紀	北海道立旭川美術館学芸員	toki.miyuki@pref.hokkaido.lg.jp
苦名 直子	北海道立三岸好太郎美術館学芸員	tomana.naoko@pref.hokkaido.lg.jp
苦名 真	北海道立近代美術館学芸第二課長	tomana.makoto@pref.hokkaido.lg.jp
中村 聖司	北海道立近代美術館学芸第三課長	nakamura.seiji3@pref.hokkaido.lg.jp
中谷 麻美	洞爺湖町教育委員会 学芸員	nakaya.asami@town.toyako.hokkaido.jp
樋泉 綾子	札幌芸術の森美術館学芸員	a.hiizumi@artpark.or.jp
福地 大輔	北海道立釧路芸術館学芸員	gk3@kushiro-artmu.jp
星田 七重	市立小樽美術館学芸員	otarubij@crest.ocn.ne.jp
細川 健裕	北海道開拓の村学芸員	hoso@kaitaku.or.jp
細川 義信	室蘭市教育委員会 学芸員	cb-haso@city.muroran.lg.jp
穂積 利明	北海道立近代美術館主任学芸員	hozumi.toshiaki@pref.hokkaido.lg.jp
松田 宏介	室蘭市教育委員会 学芸員	matsuda0102@city.muroran.lg.jp
三浦 泰之	北海道開拓記念館学芸員	miura.yasuyuki@pref.hokkaido.lg.jp
水田 順子	北海道教育庁生涯学習推進局文化スポーツ課芸術文化グループ主幹	mizuta.yoriko@pref.hokkaido.lg.jp
光岡 幸治	北海道立近代美術館主任学芸員	mitsuoka.kouji@pref.hokkaido.lg.jp
宮井 和美	モエリ沼公園学芸員	miyai.kazumi@sapporo-park.or.jp
村山 史歩	北海道立近代美術館学芸員	murayama.shiho@pref.hokkaido.lg.jp
門田 直美	美瑛市教育委員会生涯学習課課長補佐	n.monda@city.bibai.lg.jp
門間 仁史	関口雄揮記念美術館学芸員	s.momma@sekiyuchi-muse.jp
谷古宇 尚*	北海道大学大学院文学研究科准教授	yakou@let.hokudai.ac.jp
柳沢 弥生	北海道立近代美術館学芸員	yanagisawa.yayoi@pref.hokkaido.lg.jp
矢吹 俊男	前小川原記念美術館館長	yabuki.toshio@town.kutchan.lg.jp
吉崎 元章	札幌芸術の森美術館副館長	yoshizk@artpark.or.jp
吉田 豪介*	前市立小樽美術館館長	yoshida-go@msi.biglobe.ne.jp

*は特別会員（計73名）

■北海道美術館学芸員研究協議会規約

平成22年4月現在

- ◆第1条（名称）
本会は北海道美術館学芸員研究協議会（略称・道美学芸研）と称する。
- ◆第2条（目的）
本会は博物館学、美学、美術史等についての研究、協議を行なうとともに会員相互の連携、情報交換を図り、北海道の美術館等学芸員並びに学芸業務に従事するものの資質の向上、および各館の活動の充実に資することを目的とする。
- ◆第3条（事業）
本会は前条の目的を達成するために次の事業を行なう。
1. 研究会の開催
2. 会報の発行
3. 研究協議内容の収録
4. その他必要な事業
- ◆第4条（会員）
本会は北海道の美術館等学芸員並びに学芸業務に従事するものによって組織される。また本会に特別会員を置き、非常勤の館長職にあたる者、また博物館学、美術史学研究者のうち、総会で認められた者をこれに当てる。
- ◆第5条（事務局）
本会の事務局は道立近代美術館学芸部に置く。
- ◆第6条（役員）
本会の役員は下記のとおりとする。
会長（1名） 会員、特別会員から選出。
副会長（1名） 会員から選出。
幹事長（1名） 北海道立近代美術館から選出。
幹事（9名） 事業担当4名、会報担当3名、会計担当2名を会員から選出。それぞれにチーフ各1名を置く。
監査（2名） 上記役員所属館以外の会員から選出。
※顧問を廃止し、特別会員を置く。
※役員の任期は2年とする。但し再選は妨げない。また欠員が出た場合、当該美術館から補い任期満了まで務める。
- ◆第7条（会議）
本会の会議は、総会及び役員会とする。
1. 総会は毎年1回開き、次の事項を協議し、これを決定する。
(1)予算及び決算に関すること。
(2)規約改正に関すること。
(3)役員の選任に関すること。
(4)その他、特に重要な事項
2. 役員会は随時、会長が招集し、次の事項を協議する。
(1)総会に関すること。
(2)研究会の運営に関すること。
(3)その他、必要な事項。
- ◆第8条（会計年度）
本会の会計年度は1月1日から同年12月31日までとする。
- ◆第9条（会費）
会費は年3,000円とする。
- ◆付則
本規約は平成6年1月1日から施行する。
平成9年1月1日一部改正。
平成10年2月1日一部改正。
平成13年3月9日一部改正。
平成15年3月6日一部改正。

■北海道美術館学芸員研究協議会役員（50音順）

会長	奥岡 茂雄（札幌芸術の森美術館館長）	
副会長	佐藤 友哉（北海道立近代美術館学芸副館長）	
幹事長	浅川 泰（北海道立近代美術館学芸部長）	
幹事	※吉崎 元章（札幌芸術の森美術館副館長）	事業
	井内佳津恵（北海道立旭川美術館学芸課長）	事業
	久米 淳之（北海道立近代美術館主任学芸員）	事業
	渋谷 綾香（北一ヴェネツィア美術館学芸員）	事業
	三浦 泰之（北海道開拓記念館学芸員）	事業
	※新明 英仁（北海道立文学館学芸主幹）	会報
	石尾乃里子（北海道立近代美術館学芸員）	会報
	岩崎 直人（札幌芸術の森美術館学芸係長）	会報
	佐藤由美加（北海道立帯広美術館主任学芸員）	会報
	※佐藤 幸宏（北海道立近代美術館学芸第一課長）	会計
	井上みどり（本郷新記念札幌彫刻美術館学芸員）	会計
	柳沢 弥生（北海道立近代美術館学芸員）	会計
	※はチーフ	
監査	寺嶋 弘道（北海道立釧路芸術館学芸主幹）	
	苦名 直子（北海道立三岸好太郎美術館学芸員）	

平成22年4月現在での役員（所属）を記載しています。